

第44回 日本癌治療学会総会での口演(OS129-5)

2006年10月20日(金)

京王プラザホテル42F第12会場(富士)

福田式刺絡で消失した鼻腔原発形質細胞腫の一例

(同学会誌第41巻第1号166P)

牧 典彦1)浦川典彦2)富田祥史3)橋本 豪4)福田 稔5)安保 徹6)

1)牧病院内科2)(株)日ポリ化工3)牧鍼灸院4)テンジククリニック

5)福田医院6)新潟大学医学部医動物学教室

明治45年生まれの男性。平成15年8月26日に右鼻茸のため近医耳鼻科へ入院。このとき施術後の病理で形質細胞腫の診断。ご高齢であるため家族と主治医間で話し合われ経過観察となった。同12月右頬部腫脹と疼痛出現。抗生剤を処方されるか副作用で中止。平成16年4月21日当院の外来を受診。以降福田式の全身刺絡を週に一回行う。福田式全身刺絡とは当時の手技では四肢の第4指を除く16指の爪の生え際と頭部、背部、腹部、下腿後面を26番ゲージの注射針を3mlの注射シリンジに着け刺す事を示す。現在は第4指も含めて刺す手技に変わっている。同6月1日に右頬部腫脹が消失。CTでも腫瘍の縮小が認められた。同7月9日のCTで腫瘍がほぼ消失したため同8月17日刺絡を中止。現在に至るまで再発の兆候はない。